

# 移民家族の言語課題を考える —ある在日日系ブラジル人二世の ライフストーリーから—

加納 雅美

## 要 旨

本研究では、28年間日本で暮らす日系ブラジル人二世のライフストーリーから、移民家族の言語課題を考察した。調査協力者のタカハシさんは、息子が幼い頃言葉が遅いと感じ、話しかける言語を日本語に変えた。そして、自らの複数言語環境での育ちの経験から、息子に「ポルトガル語を習得してほしい」という気持ちを封印した。また、息子の言語環境を整えるため自ら日本語力の向上に努力しただけでなく、複数言語環境で生活する親子のため適応指導員として活動することとなった。タカハシさんは、家族の言語課題に対峙する過程で、複数言語環境で育つ息子の言語や教育上起こり得る困難を回避しただけでなく、自身の生き方をも変化させていった。タカハシさんのライフストーリーから、移民がとる家族の言語政策は、家族のあり方を規定し、家族の生き方をも牽引することが明らかになった。

## キーワード

移民家族 言語選択 言語環境整備 日系ブラジル人 家族の言語政策

## 1. 本研究の社会的背景と目的

### 1.1 本研究の社会的背景—日本の人口減少に伴う移民受入れと移民家族の言語課題—

総務省統計局（2021）の人口推計によると、2021年3月1日現在、日本の総人口（概算値）は1億2,548万人で、前年同月に比べ48万人も減少している。また、総務省統計局（2020）によると、日本の総人口は2011年以降減少が続いている。超高齢社会及び少子化による人口減少は、日本経済の停滞や社会保障制度の破綻、地方都市の存続の危機等、甚大なダメージを引き起こすと予想される。

人口減少が引き起こす主要課題の1つが労働者不足である。この課題に対処するため、日本は「新たな外国人材の受入れ及び共生社会実現に向けた取組」（法務省 2018）により、政策的に外国人労働者を積極的に受け入れようとしている。実際、日本で働く外国人

は年々増加している。厚生労働省（2021）によると、2020年10月末現在の外国人労働者数は、約172万人（前年比4.0%の増加）で、2007年に届出が義務化されて以降過去最高を更新した。2021年4月現在、新型コロナウイルスの影響で日本への入国には制限がある状況である。しかし日本の人口動態をみれば、今後も外国人を労働力としての受入れは必須である。つまり日本は、「移民<sup>1</sup>受入れ時代」へ突入しているのである。

今後、日本で移民が増えれば、日本で子育てをする移民家族もますます増えるであろう。実際、バブル景気の人手不足を背景に1990年に入管法が改正された時には、多くの日系人が出稼ぎのため来日した。「数年稼いで母国に戻る」つもりだった出稼ぎ労働者の中には、結果的に日本に生活を根付かせ<sup>2</sup>、子育てをする例は少なくない。

移民家族が子育てをする際に避けられないのが家族の言語課題である。すなわち、親は複数言語環境に育つ子どもの言語をどのように選択するか（言語選択）、そしてその言語選択を支えるために、親はどのように子どもの言語環境を整えていくか（言語環境整備）という課題である。移民が増加する今、移民家族の言語課題は、日本語教育における重要研究課題として注目すべき局面にある。

## 1.2 本研究の目的—家族の言語課題に対し、日本語教育はどのような貢献ができるか—

移民家族の親は、家族の言語課題をどのように考え乗り越えていくのであろうか。本研究では、1990年の入管法改正直後に来日した、ある移民の語りに焦点を当てる。調査協力者であるタカハシさん（仮名・50代男性）は、1991年に来日した日系ブラジル人二世である。タカハシさんも他の移民と同様、日本でお金を貯め4、5年でブラジルに帰国するつもりだった。しかし、来日後授かった一人息子ペドロくんを育てる過程において日本に留まることを決意し、結果的に28年間（調査当時）の歳月を日本で過ごすこととなった。タカハシさんはこれから日本で子育てをしようとしている移民の先輩と言えよう。

タカハシさんの家族も、家族の言語課題を避けて通ることはできなかった。タカハシさんは、日本の暮らしのその時々で、家族の言語課題に向き合い、最善を尽くしてきた。本研究では、タカハシさんの半生の語りから、どのように家族の言語課題に立ち向かってきたか分析する。その上で日本語教育が移民家族の言語課題にどのように貢献していくべきか考察する。

分析の観点は以下の2点である。

- (1) タカハシさんは、息子の言語をどのように考え選択したか。  
（言語選択／1つ目の問い）
- (2) タカハシさんは、息子の言語環境をどのように整えてきたか。  
（言語環境整備／2つ目の問い）

## 1.3 調査のきっかけ—調査協力者との出会い—

タカハシさんは、筆者が支援者として関わった地域日本語教室に、学習者として訪れていた。ブラジル生まれのタカハシさんは、日本人の両親のもと、家庭では日本語、周辺環境ではポルトガル語という言語環境で育った。筆者は、教室活動を通じて、タカハシさんにはペドロくん（仮名）という一人息子がいることを知った。ペドロくんは、超難関大学

を卒業し、大学院に進学したとのことであった。筆者は、児童生徒対象の初期日本語教室での支援経験から、日本に暮らす複数言語環境にいる子どもたちが、日本の教育システムの中で教科学習を進めるのは難しい、と考えていた。だから、複数言語環境にいるタカハシさんの息子ペドロくんが、学力的に困難なく進学している<sup>3</sup>のは、大変稀な例なのではないかと驚嘆した。そしてタカハシさんが子育ての過程で、ペドロくんの言語をどのように選択し、またどのように言語環境を整えてきたのか興味を持った。タカハシさんにこれらの点について詳しく教えてほしいと依頼したところ、快く引き受けてくれたのであった。タカハシさんの、複数言語環境にいる息子の子育て過程を知りたいと考えたのが調査のきっかけであった。

## 2. 先行研究と本研究の位置づけ

本章では、日本の移民家族における言語課題に関する先行研究を示した上で、本研究の位置づけを示す。

### 2.1 日本の移民家族における言語課題に関する先行研究

日本の移民家族の言語課題に関する量的先行研究を以下に3つ示す。

石井（2007）は、国立国語研究所が1995年から1999年に実施したプロジェクト「児童生徒に対する日本語教育のカリキュラムに関する国際的研究」での調査データから、日本で暮らすJSLの子どもたちの家庭言語の当時の現状を述べている。石井（2007）は、親が子に対して母語を使う母語型の家庭と、日本語を使う日本語型の家庭とを区分して分析した。そして、「子どもは基本的に親が自分に対して話しかけている言語で親に話している」（p.30）が、母語を話す親に対して日本語で半分以上話す子どもが「25%前後見られる」（p.30）と指摘している。日本で暮らす子どもは日本語が優位になりやすい状況を示している。また、この調査によると「子どもに対してすべてあるいは主に日本語を使用している親は一割弱」（p.30）しかいない。家庭内言語を日本語とするのは、親が意識して選択しなければならないのである。また、日本語型の家庭で、母語・日本語両言語が高い力を見せた子どもに関し「決して日本語力が高い親が揃っているわけではない」（p.37）としている。石井（2007）は、調査結果を受け、「親の日本語力の高さよりも、子どもの言語能力を育てる力として必要なのは、子どもの教育についての見通しを持ち言語能力の発達を意識的に捉え、環境を整備することができる力」（p.37）と述べている。つまり、家庭で子どもの言語力を伸ばすためには、親の日本語力にかかわらず、親が子どもの言語環境を意識的に整える必要があるのである。

友沢（2019）は、子どもの言語能力と家庭言語能力との関係を研究した。中国語を母語とする児童が多く通う小学校において、児童が1年生の時と6年生の時、その保護者に対しアンケート及びインタビューを実施した。1回目のアンケートは、日本生まれかつ日中2言語環境にいる小学校1年生の保護者17家族を対象にした。2回目は、その児童が6年生になった際に同じ家族（ただし3家族は転出）を対象にした。友沢（2019）は、児童の言語能力の変化において、日本語能力の高い子どもは「勉強する」「読書する」「自分の

考えをもつ」の3項目においてプラスの変化が認められ」(p.143)る一方で、中国語能力別にみた同様の3項目には変化が見られないとしている。この研究は、母語能力に関わらず日本語能力の高い児童の方が学力的に優位に推移していると示している。日本の学校教育の環境では、子どもの日本語能力が学力に影響するのである。

宮崎(2014)は、日本に滞在する複数言語環境にいる子どもの母語保持の状況や家庭での言語環境の詳細が知られていない、という問題意識から、家庭における言語選択の実態を調査した。上智大学短期大学部主催の日本語教室に通う子どもを対象としたアンケート調査で、66名からの回答を得ている。宮崎(2014)は、この調査を踏まえ、①家庭で「母語」を使っている子どもでも、「滞在年数が長くなるほど、つまり子どもが成長するほど日本語の使用が多くなる」(p.131)傾向にある②父母の国での生活体験がない子どもであっても家庭内言語が母語である場合が多いことから「日本語が強くなりつつある子どもにとっても母語は心理的な意味でも道具としても重要である」(p.131)③「母語」グループにより「家庭における言語使用と母語保持の希望の有無が異なる」(p.132)と述べている。調査の結果を踏まえ、宮崎(2014)は、「母語支援は彼らの多文化アイデンティティを育てるうえでもよい影響があると考えられる。母語支援プログラムは、公教育の一環として行われることが理想」(p.132)と提案している。宮崎(2014)は、日本で暮らす複数言語環境にいる子どもたちが時間の経過により家庭においても周辺環境の言語である日本語が強くなっていく傾向にある一方で、親の言語は親と子の情意的な絆であり、家庭にとって重要であることを示唆している。

複数言語環境にある家族の言語課題に関する質的研究において、高橋(2013)は、自身の国際結婚家庭における子育てを振り返り、親としての関わりが、自身の子どものことばと心の育ちにどのような影響があったかを考察している。子どもの複数言語意識の変遷や、中国人である夫と子どもとの関係など、具体的なエピソード交えて述べている。紆余曲折を経て高橋が出した子どもの言語獲得に対する結論は、「子どものなかに、思考でき、依って立つ言語が一つしっかり育てばいい、そして次の言語はその依って立つ言語をステップにして伸びていけばいい」(p.344)とした。成長の過程で子ども自身が複数言語能力と向き合い生きていくことを、子ども自身にゆだねるまでに至った親の葛藤が述べられている。

三宅(2018)は、1960年代に20代にイギリス人と結婚し渡英した女性、愛子とその娘Sakiの人生の軌跡を調査対象とした研究である。母である愛子がイギリスに渡った当時は、子どもに日本語を継承させる環境に無かった。日本語に興味を示さない子どもに「日本語を勉強したい気持ちがあれば将来でもできる」(p.134)と自分に言い聞かせるといった日本人母としての葛藤が描かれている。娘のSakiは、留学を契機に日本に興味を持ち一定のレベルまでの日本語を習得した。その後、ブラジルへ渡りブラジル人と結婚、イギリスへ戻り子育てをしたことから、Sakiのことは英語とポルトガル語に移っていった。また、移動を伴うSaki夫妻の夫との家庭内言語に対する意識の相違や、Saki自身が保有する、複合された文化への肯定的な認識などが記述されている。50年という長いスパンで、母娘2世代の移動する人生を対象としたライフストーリー研究である。

## 2.2 先行研究に対する本研究の位置づけ

これらの先行研究から以下の3点が明らかである。1点目は、石井（2007）が指摘するとおり、複数言語環境における教育に関し、親が子の教育に対し見通しを持ち、その見通しに沿って子どもの言語環境を整備する必要がある点である。宮崎（2014）の指摘するとおり母語支援が公教育で支えられれば理想である。しかし、友沢（2019）の研究から日本の学校教育環境で育つ子どもの場合、日本語力が学力に影響しているのが実情である。つまり現時点では、日本語の言語環境整備が子どもの教育に有利に働くと言える。

2点目は、親は、親の母語が親と子の単なる意思疎通だけでなく、情意的な絆を深めるために重要だ、と考える点である。親は子どもに周辺環境の言語と同時に親の母語の習得をも期待する。高橋（2013）も三宅（2018）も母語習得を期待する親の心情を述べている。中島（2016）に代表されるバイリンガル教育研究は、子ども自身の言語能力を育てる視点だけではなく、複数言語環境で子育てをする親の期待にも沿っている。年少者日本語教育において、バイリンガル教育に研究の重心が置かれている理由の1つといえる。

3点目は、子育ての過程で、親は家族の言語課題に対し様々な葛藤に直面する点である。高橋（2013）や三宅（2018）からもわかるとおり、親は、子どもに親の言語を含めた複数言語の習得を期待する。しかし、子育ての過程において、子どもが親の期待どおり言語習得をするかについては、親の思いだけでは如何ともしがたいのである。

本研究での調査協力者、タカハシさんの息子ペドロくんは、複数言語環境にある子どもたちの進学が難しい日本の環境に育ちながらも、超難関大学に進学、大学院を卒業した。進学状況だけに注目すれば、タカハシさん家族には何の問題もなかったかのようにみえる。しかしタカハシさんの家族にも言語課題はあったのではないだろうか。タカハシさん家族の言語課題、つまり息子の言語をどのように選択し、どのように言語環境を整えてきたのか、その過程ではどのような葛藤があったか、これらについて先行研究を踏まえて分析する。その上で日本語教育が移民家族の言語課題にどのように貢献していくべきか考察する。

## 3. 研究方法

### 3.1 ライフストーリー研究法の採用

本研究では、タカハシさんが複数言語環境にある息子を中心に家族の言語課題にどのように立ち向かってきたか、その過程を語るインタビューデータを対象とする。語られる事柄から、歴史上の事実を突き止めるものではなく、タカハシさんの視点から複数言語環境で生きてきた移民とその家族の背景にある社会課題を考察しようとするものである。考察にあたってはライフストーリー研究法を採用することとした。

山田（2005）は、社会学の立場から、ライフストーリーを「個人によって語られた物語が、その人自身に帰属するというよりはむしろ、それが語られた相互行為の文脈に依存する。」(p.3)としている。また、桜井（2005）は、「ライフストーリーには、〈いまーここ〉の語り手と聞き手の相互行為、とりわけインタビュー行為によって生み出されるものであること、「語られること」が「語る」行為と分かちがたく結びついている」(p.9)としている。これら社会学におけるライフストーリーに関するアプローチを総括し、三代（2014）



は、ライフストーリー研究法を「インタビューを語り手と聞き手が構成したストーリーとして解釈することで、語り手の主観とその社会的構成を明らかにする研究手法」(p.2)としている。つまり、語り手と聞き手が作る場が、語り手の語りを生み出しているのである。

本調査は、タカハシさんの、複数言語環境にいる息子の子育ての過程を知りたくて始めた。したがって聞き手の関心は「どのように息子の言語課題立ち向かってきたか」であった。しかし実際のインタビューの場では、タカハシさんから複数言語環境で生きてきたこれまでの人生の様々なエピソードが語られた。語りは子育てを通したタカハシさん自身の生きてきた軌跡であったと感じられた。三代(2014)のいう「語り手の主観とその社会的構成」を明らかにするため、家族の言語課題を分析対象としつつ、タカハシさんの語り全体から背景にある社会問題を含めて考察した。

### 3.2 インタビュー調査概要

タカハシさんへのインタビュー調査は2回実施した。1回目は2019年4月29日(3時間25分)、2回目は同年8月13日(3時間50分)であり、半構造化インタビューにより実施した。タカハシさんの複数言語環境での育ちと子育て全体を捉えるため、テーマとして①タカハシさんのブラジルにおける年少期の経験②タカハシさんの息子に対する家庭教育実践③適応指導員<sup>4</sup>(以下「指導員」という。))の仕事に関する経験、の3つを柱とした。調査前に許可を得たうえでインタビュー音声(ICレコーダー)に録音した。

分析は、佐藤(2008)第4章(P.45-58)を参考にした。まず、文字化したインタビューデータを意味で区切って配置した表を表計算ソフト(Microsoft Excel)にて作成した。次に意味に沿ってコード化した。その後、家族の言語課題に関連する語りを抽出した(脱文脈化)。そして、息子の言語選択及び言語環境整備の項目毎で並べ替えた(データベース化)。並べ替えたデータを意味のまとまりとして再文脈化した(ストーリー化)。このデータから、タカハシさんを取りまく言語課題を分析する手順をとった。

### 3.3 言語能力を解釈する際の一概念「言語能力意識」

「言語能力意識」とは、川上(2011)が「移動する子ども」を対象とした研究で考察の際に使用する概念である。「移動する子ども」は、「空間軸」「時間軸」「言語軸」の3つの軸で広がる生活社会で、「社会的な文脈における他者との関係性の中で自らの言語能力意識を形成」(川上 2011, p.22)している。そして、言語能力意識は、3つの軸の中に広がる「動態的な影響要因によって多様に展開」(同)している。つまり、言語能力意識は、複数言語能力に対する断片的な自己評価ではなく、時間の経過やその時々環境により変化し、自己形成に影響を及ぼすものである。

「移動する子ども」として成長した大学生が、複数言語をどのように習得し、複数言語能力についてどのような認識を持っているかを追究した尾関・川上(2010)は、「学習者の中にある複数言語に対する「主観的な言語能力意識」が言語学習においても、学習者の生き方においても非常に大きい位置を占める」(p.91)と述べている。つまり、主観的な「言語能力意識」が、「移動する子ども」の言語学習や言語使用、生き方へも影響している。

タカハシさんは、語りの中で、その時々における自らの日本語の言語能力について言及

している。本稿では、タカハシさんの語りを解釈するにあたり「言語能力意識」の概念を援用する。なぜなら、タカハシさんは、ブラジルの複数言語環境で育ったいわば大人になった「移動する子ども」だからである。そして、タカハシさんの主観的な言語能力意識は、自分自身や息子の言語習得に影響しただけでなく、子育てを含めた生き方にも影響を及ぼしていると考えられるからである。

#### 4. 調査結果

本章では、タカハシさんの息子のことばに関する語りに焦点を当て、インタビューデータをストーリー化して記述する。4.1では、タカハシさんの生い立ちから来日に至るまでの経緯概要、4.2では、息子の言語選択に関する語りの分析、4.3では、息子への言語環境整備に関する語りの分析を扱う。なお、インタビューデータの引用は、冒頭を字下げしタカハシさんの語りの冒頭に「タ：」、筆者の語りの冒頭に「\*：」と示す。

##### 4.1 調査協力者タカハシさんの生い立ちと来日

タカハシさんの両親は、戦後（1959年）ブラジルに渡った移民（一世）である。タカハシさんは、1962年にブラジルで生まれた。5人兄弟の2番目で、長男である。タカハシさんが幼い頃、父は、戦前からブラジルに移住している日系人の営む養鶏場でひよこを売りさばく仕事をしていた。父の仕事は過酷であった。そして、家族は父と会えるのは年に数回しかなかった。

使用言語に関して、家庭では、家を守る母を中心に日本語でやり取りするのが常であった。一方、家庭外の環境は、在ブラジル日系人については、ほとんどが二世以降の世代であった。そして通った現地校で、アフリカ系やイタリア系などの移民とも教室を共にしていた。つまり、家庭外では、ブラジルの言語（ポルトガル語）を使用していたのであった。

学校の勉強に関して、得意な数学以外は「いっつもぎりぎり」（タカハシさん談）の成績であった。ポルトガル語が十分でない両親から、学校の宿題を見てもらうといった学習面でのサポートを受けることは無かったという。

家庭は貧しく、タカハシさんは、一家の長男として家計を支えなければならない意識が強かった。そこで、高校は、工場で働きながら勉強できる夜間部に進学した。しかし、工場労働を経験し、タカハシさんは、ブラジル社会の学歴による格差を感じた。高卒と大卒の待遇の差が激しかったのである。加えて、ブラジルでは、日系人の大学進学率が、他の国民よりも高かった<sup>5</sup>ことから、日系人の大学進学は当たり前の雰囲気があったという。タカハシさんは、工場を1年で辞め、アルバイトと夜間高校を両立させながら大学進学を目指すことにした。そして1980年、18歳の時にD州農業大学に合格した。

大学を卒業したタカハシさんは、大手日系企業に就職した。工場で働いていた頃に比べ収入は何倍にもなり、また社会的にも優遇された扱いになったという。しかし、ブラジルは治安が悪く、強盗に襲われるなどのトラブルを立て続けに経験した。タカハシさんと結婚したばかりの妻は憔悴し、2人は治安の悪いブラジルから逃げたいと考えようになった。両親の祖国である日本で4、5年気分転換し、お金を貯めてブラジルで起業したいと考えた。

1991年、タカハシさんは、夢と希望を持って来日した。しかし、日本に来てすぐ職場でブラジル人同士のトラブルに巻き込まれた。日本語ができるブラジル人とできないブラジル人とのいさかいである。タカハシさんは、その経験から、日本語ができないと「騙される」、「自分もさらにもっと日本語勉強せにゃいけん」（タカハシさん談）と思ったという。

1994年、一人息子のペドロくんが誕生した。そして、後述するとおり、息子を育てる過程で、結果的に日本で28年の歳月を過ごすこととなるのであった。

## 4.2 息子の言語選択に関する語りと分析（1つ目の問い）

タカハシさんは、息子の言語の選択を迫られた局面で、どのように考え息子の言語を選択してきたのであろうか。本節では、息子の言語選択に関わる語りと分析を示す。

### 4.2.1 言語選択のきっかけは「言葉が遅い」

タカハシ夫妻は、来日して数年経っても、予定していた額の貯蓄はできていなかった。しかし、妻が30代前半となった頃に夫妻は子どもが欲しいと考ええるようになった。そこで、日本で出産し、子育てをしながら働き、貯蓄しようと考えた。そして、息子が学齢期になる前にブラジルに帰るつもりであった。このため、妻の出産後、早い時期から息子を保育園にあずけることとなった。息子の保育園時代、タカハシさんは、子どもの言語に関する最初の課題に対峙することとなるのである。それは、息子の言葉が遅いことであった。

タ：嫁さんも稼いでお金を貯めて4歳ぐらいの時まで帰るかなと思っていた。1歳ぐらいの時にも保育園に子ども預けたりしてたのね。だけど、言葉が周りの子と比べちゃうと、子どもが話せなかったのね。それで嫁さんも、新人母というか、はじめてお母さんで、まわりの子どもがみんな話せるようになってるのに、うちの息子が話さないっていうか。で、先生、保育園先生の中にもちょっと遅いね、と言うか、言われたり。わかる？その、うちでその時は嫁さんと僕はポルトガル語話したの。で、1日保育園預けてるは、周りが日本語、先生も日本語話してるね。その混乱で日本語が定着してないんじゃないか、遅れが出ているんじゃないかと、すごいそれに嫁さんが敏感になっちゃったのね。

だからおうちの中でも日本語を使うようにしたら本人の負担が早く日本語を覚えるようになるんじゃないか、とか話せるんじゃないのとかね。まあじゃあそうしましょうって言って、本人の前で、家に帰ってきて、日本語話すようにした。だから、まあまあ、周りと比べたら、日本語に本当に話す言葉は遅かったね。

タカハシさん夫妻は、ペドロくんの言葉の発達について、通園する保育園の子どもたちに比べて遅い、と感じたのであった。通っている保育園の保育士からも「ちょっと遅いね」と言われた。母として新人の妻は、息子の言語発達に敏感になってしまったのである。タカハシさん夫妻は、ペドロくんが保育園の日本語と家庭内言語であるポルトガル語の2言語間で混乱していると危惧した。そして、家庭内言語をペドロくんの家庭外の周辺環境、すなわち保育園で話されている日本語に合わせる、という決断をしたのであった。



#### 4.2.2 息子の言語選択と、複数言語環境で育った「トラウマ」

その後、ベドロくんは、日本語を第一言語として成長した。そして認知的に問題無く育っていった。タカハシさんは、息子の第一言語が日本語であり、ポルトガル語を使用しない現状に対し、どのように感じているのであろうか。

\*：息子さんは、日本語、まあ、日本の教育でずっと育てるって決めて。でも、うちの中でお話するときに、やっぱりポルトガル語も使えたら良かったなって思いませんでしたか？

タ：うん、僕は思わなかったっていうかね。周り人から言われるね。「もったいなかった」っていうかね。あの、「あなたの息子が、こんなにね。例えば●●大学（大学名）行けるぐらいなんだから、それぐらいの力はね。2つ覚えるのはあったんじゃないの」っていうかね。ただ、僕たちの、その、小さいときには、2つ言葉あったら、言葉で遅れがあったり、僕もブラジルで、そのトラウマっていうか。まあ、家では日本語、ブラジルで生活しているんだけど、お父さんやお母さんが日本語で話しているから、いつもポルトガルの言語が全然伸びなかったり、いつも居残りしたり、苦労したっていうかね。受験、大学に入る受験の時にも、1回目の失敗は、作文だっただろうと自分では思っているっていうかね。ブラジルも結構点数が重いのが作文なのね。テーマが出て作文で、日本の、例えば400文字で書かないといけんって。それでその作文の力を見られるっていうかね。そこには僕には自信がなかったっていうかね。高校やって最初の受験の時はそれで失敗したね。0点だった。

タカハシさんは、息子がポルトガル語を使えないことを他の人からは「もったいなかった」と言われるが、自身は息子がポルトガル語も使えたら良かったとは思わない、と答えた。むしろ、自身が2つの言語環境で生活した経験から「ポルトガル語が全然伸びなかった」「いつも居残りをしていた」といった苦労があったことを語った。タカハシさんにとって、複数言語環境で育った経験は「トラウマ」と表現されるほど苦労があったのである。そしてその苦労を息子には経験させたくない思いが強かったのである。

#### 4.2.3 息子は自分の言語をどう考えているか、という問いから引き出されたエピソード

では、ベドロくん自身は、自分の言語についてどのように感じているのであろうか。筆者は知りたいと考え、父であるタカハシさんに、以下のとおり尋ねてみた。

\*：えっと、息子さんの話になりますけど、言葉の話で。ブラジルの言葉を使わないで日本語で話をするようになって。で、なんか、息子さんはそれをどう思ってたって、って思います？

タ：息子もそれに対して、希望は日本語を勉強するっていうか。まあ、特に（小学校）3年生ぐらいの時に（息子に）1回話していると思うんだけど、ポルトガル語なり違う言葉を覚えたいか、日本語にしたいかということは話したんです。

\*：子どもと一緒に考えたんですね。

タ：子どもだからその時は自分の楽な方にしたと思うんだけど、その時は本人は日本語にしたいって。じゃそうしよう。

\*：両方っていうのは無かったんですか？

タ：その時は言ったつもりなんですけれど。その、ポルトガル語をね、勉強したいって言うんだったら親が教えてもいいし、親からは嫌だって言うんだったらね。違う人。だけど、自分の考えていうか自分のブラジルにおった苦労というかね。逆に苦労を見ると、その（言語を）2つ持っていくっていうのはかなり難しいんだよね。僕もブラジルで一生懸命努力したと思うんだけど、反対に勉強きらいだったよ。遊ぶやスポーツ※※※（筆者注：聞き取り不能）だったね。それなりにして大学まで行けたっていうかね。ただ、やっぱり、その、2つ持っていくっていうのは、僕にはできなかった。苦労がすごいあるって、僕は感じた。僕はそれを息子にはさせたくない。本人がやりたくなったらすごいサポートしようと思ったから。本人としては周りを考えて、今まで小学校、中学校、日系・日本人しかいないところにおったんだったら日本語にしたらいんじゃないのって。

タカハシさんは、息子が自分の言語をどのように考えているか、という質問に対し、息子が小学校3年生頃のエピソードを語ったのである。それは、息子がポルトガル語を学ぶかどうか検討したエピソードであった。息子は、このまま日本で暮らすならポルトガル語の習得は必要ない、と意見を述べたのであった。息子の意見に対し、タカハシさんは、自分が複数言語環境で育ち、2つの言語を習得するのが困難だった経験を踏まえ、息子に2つの言語を習得する苦労をさせたくない、と語ったのである。

#### 4.2.4 タカハシさんは、息子の言語をどのように考え選択したか（1つ目の問いの分析）

上記に述べたタカハシさんの語りで、息子の言語選択には2つの局面があったことがわかる。1つ目は、息子が保育園に通っている頃の言語選択である。タカハシさん夫妻は、息子の言葉が遅いと感じた。そのうえ、保育士から遅いと指摘された。タカハシさんは、息子の言葉が遅い原因を、複数言語使用の環境による混乱だと考えた。当時、タカハシさんは日本で貯蓄し数年内にブラジルに帰国して起業するつもりであった。だから、息子がポルトガル語に触れる機会が少なくなれば、一家がブラジルに帰国後、息子は言語で苦勞することが予想された。それでもタカハシさんは、家庭内で息子に語りかける言語を日本語にすると決めたのであった。

2つ目は、息子が小学3年生の頃の言語選択である。息子の言語をこのまま日本語だけでいいとするかポルトガル語を習得させるか息子と相談したのである。先行研究に示されているとおり、親の母語の習得は、親と子の単なる意思疎通だけでなく、情意的な絆を深めるため、家族にとって重要である。筆者は、タカハシさんにも、息子にブラジルの言葉を習得してほしい気持ちがあったと推測した。そして、4.2.2で示した質問をした。しかし、タカハシさんは「うん、僕は（ポルトガル語を学んでほしいと）思わなかった」と答えた。一方、息子は自分の言語をどう考えているか質問した際（4.2.3）、タカハシさんは、息子が小学校3年生の頃、ポルトガル語を学ぶかどうか相談したエピソードを語ったのであった。この語りから、タカハシさんは、この頃、息子に自分の国の言葉を習得してほしい気

持ちがあったことが表出されたのである。しかも、タカハシさんは、親から習うのが嫌なら他の人からでも習わせよう、とまでしていた。息子にポルトガル語を習得してほしい気持ちは強かったのである。しかしタカハシさんの息子は、親の気持ちとは裏腹に、このまま日本で暮らすなら、もはやポルトガル語の習得は必要ない、と意思表示したのであった。

タカハシさんは、1つ目の局面では息子に話しかける言語を日本語とポルトガル語のどちらにするか葛藤した。そして2つ目の局面では息子にポルトガル語を習わせたい気持ちと子どもの意思尊重の間とで葛藤したのであった。

#### 4.2.5 タカハシさんが息子にポルトガル語を習わせなかった理由の背景

タカハシさんは、これらの葛藤を感じながらも、最終的には、息子にポルトガル語を習わせることは無かった。その背景には、自分自身の複数言語環境での育ちの経験があった。

タカハシさん自身が複数言語環境で育った経験は、タカハシさんに、日本語とポルトガル語の双方を「2つ持っていくってのはかなり難しい」という認識を生んだ。自身の言語上の困難な経験を「トラウマ」(4.2.2)と表現している。複数言語環境で育った自身の経験が、息子にポルトガル語の習得の苦労を強いることを回避させたのである。

稲垣(2015)は、海外における親の母語を子どもに継承させる行為のありようをより深く理解する必要があるという問題意識から、アイルランドの在留邦人に対しインタビュー調査を実施した。稲垣は、「パターナリズム<sup>6</sup>」を行使する立場である親が、子の言語を考えるときのことを以下のように警鐘している。

「パターナリズム」を行使する立場に立つ者がつねに内省しなければいけないのは、自己のその働きかけが本当にその人のためのものなのか、自分のエゴのためではないのか、という問いである。(p.36)

稲垣は、周辺環境が親の母語と異なる状況においては、親は自身の母語を子どもに習得させようとする前に、その言語習得がその子にとって本当にためになるかどうかを考える必要があると指摘しているのである。

タカハシさんは、自身の複数言語環境での育ちの経験から、息子を複数言語環境に置くこと、あるいはポルトガル語を習得させようとする行為が、稲垣の指摘する「自分のエゴのため」という危険性をはらんでいると感じたのであろう。だからタカハシさんは、息子の意思を尊重した。そして、「ポルトガル語を習得してほしい」という気持ちを「自分のエゴ」として封印したのである。気持ちを封印したからこそ、筆者の「やっぱりポルトガル語も使えたら良かったって思いませんでしたか」との質問に、「僕は思わなかった」と答えたのであった。

つまり、タカハシさんは、子育ての年月の経過の中で、息子にポルトガル語の習得を強要するのではなく、周辺環境の言語である日本語を選択するのが最善であると結論付けたのである。親としての葛藤を感じながらも、自身の複数言語環境での育ちの経験を活かし、息子にとって最善と考える言語を選択したのである。

#### 4.3 息子の言語環境整備に関する語りと分析（2つ目の問い）

息子の言語に日本語を選択したタカハシさんは、息子の言語環境をどのように整えてきたのであろうか。本節では、タカハシさんの言語環境整備に関する語りと分析を示す。

##### 4.3.1 息子の質問—親として応じられなかった苦い経験—

幼い頃「言葉が遅い」と心配されたペドロくんであったが、その後言語面でも認知面でも問題なく成長していった。そして5歳のペドロくんに、「これなに？」と何でも質問する知的好奇心の旺盛な時期が到来した。この時期、タカハシさんは、息子の知的好奇心に親として応じられない苦い経験をしたのであった。

タ：僕は1回、その自分として思い出があるのは、これはまずいわっていうことで。  
●●団地（地名）の周りに、本人を送り迎えしていたのかな。幼稚園に。帰りに本人がすごい、そのまだ5歳なのに漢字にも興味出てきたのね。で、わかる漢字を読んだりして、ま、まだわからない、5歳だからまだわからない漢字がいっぱいね。「父さん、あの漢字どう読むの」って聞かれたの。「ごめん、僕が読めないって」いうかね。逆にそこで情けないというかね。子どもが興味があるのに、教えられないっていうのはどんな親やっていってね。もっと日本語勉強しないと。

タカハシさんは、息子から「お父さん、あの漢字どう読むの」と尋ねられたが、自分自身が「読めない」経験をしたのである。自身の日本語力が充分でないことをふがいなく感じた。そして、親としてもっと日本語を勉強しないといけない、と認識したのであった。

##### 4.3.2 日本語を学ぶ親の努力

タカハシさんには、来日当初からしばらくは、日本で貯蓄しブラジルで起業する夢があった。しかし、息子が小学校に入学する時期、日本に残ることを決断した。タカハシさんは日本の教育環境の方が、息子に質の高い教育を受けさせられると考えた。そして自分の夢を捨て、日本に残ると決意したのであった。

タカハシさんは、息子にとって教育上良いと考えられるあらゆる機会を与えた。幼い頃からそろばん塾やスイミングなどの習い事をさせたのである。しかし、タカハシさんの家庭教育は、息子に「与える」だけではなかった。息子の日本語を支えるため、タカハシ夫妻自身が、日本語を習得する努力を惜しまなかったのである。

タ：（嫁さんは）特に子どもが生まれたときから一生懸命子どもと一緒に日本語を勉強して、努力して日本語も話せるっちゅうか。実際は、今は僕と同じ仕事を小学校でしている。ああ、子どもにもっと教育教えたいていうことで、嫁さんはブラジルでも教育の方の大学出ているんですよ。だからまあ、日本のやりたい事だった。本人も日本語は難しいことだし、子どもも、少しわかるようになってきた。

\*：奥様は、お子さんと日本語を勉強するのにどうやっていました？

タ：もうおんなじように。

\*：国語の教科書？

タ：そう、ドリル使って。

\*：ドリル使って。

タ：使って。で、嫁さんはそれに対して、図書館いっぱい利用したね。本をいろいろ読んだ。

\*：読んだ。

タ：読んだね。

タカハシさんは、妻が日本語を習得するために、息子と同じ国語のドリルを使って日本語を勉強したことや、図書館に通い、本を読んだエピソードを語った。母である妻自身が、日本語の習得に力を注いだのである。

#### 4.3.3 小学校の指導員への転職

父であるタカハシさんも、自分の日本語力をより向上させたいと考えていた。ペドロくんが小学校に入学する頃、タカハシさんに、外国人児童をサポートする指導員にならないかと声がかかった。タカハシさんの住む公団住宅には、外国人住民が住み始めていた<sup>7</sup>。増え続ける外国人児童をサポートする人材を確保するため、タカハシさんに誘いの声がかかったのである。

タ：僕もその、息子が生まれたのが日本において4、5年おったんかな。やっぱり日本語が、工場に話す日本語はわかっていたのかな。話せたっていうか。自分で●●（会社名）の方でも派遣会社通さずにビザ関係できるようになったし、だんだん日本語も話せる、日本語、ただ書き読みが全然できてなかった。息子がやっぱりその漢字が覚えたい。「お父さん漢字なんて書いてあるの」って言われたんだけど、読めない、お父さん教えられないって情けない。そんな時に周りの外国、日系関係の暮らしを見ると、僕と一緒にパターンっていうかね。子どもがだんだん生まれて日本で育っているのに、親が日本語教えないっていうか。（中略）自分のためになるっっちゃうか、もっと日本語が書ける読めるようになるって。あれやったら息子のためになるって。それプラス、周りの子どもに親をたすけられるっていうかなって。そう思って教育の方に入っていった。それが自分の教育の世界に入っていったんだね。

タカハシさんは、来日当初勤めていた日系ブラジル人従業員が多く働く工場を辞め、同僚がすべて日本人という環境の工場で働いていた。職場で同僚とコミュニケーションする際は日本語を使っていた。しかし、工場で使う言葉しか理解できていないと認識していた。また、幼い息子に漢字の読み方を尋ねられてわからなかった苦い経験から、他の外国人住民も同様の経験をしているのではないかと考えた。そこで、指導員になり、自分の日本語力の向上と、息子の教育、そして周囲の外国人住民のためになろうと考えたのであった。

指導員として働き始めた当初は、ブラジルと異なる日本の学校文化がわからず翻訳に苦労したという。しかし概ね20年の経験を積み重ね、現在はベテラン指導員として、学校と生徒を結ぶ役割を担い活躍している。

#### 4.3.4 指導員としての語りから—あなたたちはそこにいかないように—

タカハシさんは、インタビュー時日本語教育研究科に学生として在籍していた筆者に、



指導員としての活動を伝えようと、学校現場で起こった様々なエピソード語ってくれた。そのうちの1つは、生徒たちに勉強を促す声がけをするとき、自分の出稼ぎ労働者としての経験を織り交ぜて話しているエピソードであった。

タ：子どもたちに、特に中学生には言うんだけど、僕みたいに、僕も日本に来た時には、あなたたちの親と同じように工場で流れ作業して仕事したんだよ。「えー」って言われるけど、今は座ってね、エアコンあったりして指導者として仕事しているんだけど、あなたたちのお父さんが仕事しているのは工場で働いて、立って仕事したりエアコンなしで8時間12時間仕事しないといけないんだよっていうかね。(中略)そこまでの仕事ってどれくらいのどんな仕事かを確認して。あなたたちはそこにいかないようにって。勉強しないとそこに行ってしまうよって。(中略)それをさせたくないから、今勉強したり高校行ったり大学行ったりして勉強しなさいって。今言っている。

タカハシさんは、生徒たちに声がけする際、自身の出稼ぎ時代及び生徒たちの親の労働環境と、今指導員として活動している労働環境を対比して話している。そして生徒たちに「あなたたちはそこにいかないように」将来を見据えて勉強するよう言い聞かせていると語ったのであった。「そこ」とは、出稼ぎ労働者としての労働環境を指している。物理的な環境不備と長時間労働を、「エアコンなし」や何時間、といった表現で提示している。出稼ぎ労働経験者であり、長く指導員として児童生徒やその保護者を見てきた経験から発せられた言葉である。

#### 4.3.5 タカハシさんは、息子の言語環境をどのように整えてきたか（2つ目の問いの分析）

タカハシさんの語りからは、息子の言語環境を熱心に整えようとしてきた努力がわかる。まず、息子の言語環境を整えるため、タカハシさんと妻は自分たち自身の日本語力を向上させようとしてきた。(4.3.2) 妻は、息子と同じようにドリルを使い、図書館に通った。また、タカハシさんは、「工場の言葉」だけでは飽き足らず、十分に読み書きができるようになりたいと考えた。そして、息子が小学校に入学する頃、工場勤務から転職し、指導員として活動をし始めたのである(4.3.3)。指導員としての活動は、息子の言語環境を支えるためだけでなく、「プラス、周りの子どもに親をたすけられるっていうかな」と語り、自身と同様に複数言語環境で生活する親子のためにという社会的責務までも意識していたと語ったのである。

#### 4.3.6 タカハシさんの熱心さを支える原動力

タカハシさんはこの他、息子の育児環境を整えるため両親を日本に呼び寄せたり、息子に小さい頃から習い事させたりといったエピソードも語った。息子の教育にかけては全身全霊で取り組んできた熱心さが感じられた。この熱心さを支える原動力は一体どこから湧き上がってきたのであろうか。原動力は、タカハシさんの経験の背後にある2つの要素と考察した。1つ目の要素は、日本語に対する「不安感を伴う言語能力意識<sup>8</sup>」である。2つ目の要素は、ブラジルの学歴社会と日本での出稼ぎ労働者としての経験である。

1つ目の要素について、タカハシさんには、日本で暮らす過程で、日本語に対する「不

「不安感を伴う言語能力意識」があった。長いインタビューの間には、息子が保育園時代、漢字の読み方を尋ねられてわからなかったエピソード(4.3.1)がたびたび語られた。親として子どもの質問に答えられなかった無念さが表れていた。タカハシさんは年少期、ポルトガル語や勉強がわからなくても両親に尋ねることができない環境に育った。父となったタカハシさんは、逆の立場から、息子の疑問に答えられないという不甲斐ない思いを経験することになったのである。不甲斐ない思いは、日本語に対する「不安感を伴う言語能力意識」となった。「不安感を伴う言語能力意識」は、自らの日本語能力向上への努力だけでなく、息子にできる限りのことをしてあげなければならないという親としての使命感に転嫁されたのである。さらに、小学校の指導員になる際の語りからは、自身の息子への使命感だけでなく、他の移民のためといった社会的責務を意識するまでに至った。タカハシさんの「不安感を伴う言語能力意識」は、自身の日本語力向上と息子の教育、ひいては社会的責務を意識化する原動力になったのである。

2つ目の要素について、日系ブラジル人二世であるタカハシさんは、ブラジルの学歴社会と、日本での出稼ぎ労働の双方を経験した。ブラジルの学歴社会において、タカハシさんは、経済的あるいは言語上の困難を乗り越え、大学を卒業した。夜間高校で学びながら工場で働いていた頃に比べ収入は何倍にもなり、また社会的にも優遇されていた。一方、来日してからの出稼ぎ労働者としての経験では、言語の壁と厳しい労働環境といった困難を経験した。指導員として生徒たちに「あなたたちはそこにいかないように」と警告する現在の語り(4.3.4)には、社会的に弱い立場である出稼ぎ労働者の実感が表れていた。タカハシさんは、生徒たちが親世代のように社会的に弱い立場に留まらないようにしたい。そのためには勉強して十分な学力をつけるよう、生徒に促しているのである。

生徒たちへのこの語りの裏には、幼い頃の息子への想いが表れているのである。息子には、自分が経験した出稼ぎ労働者としての苦勞をさせまい、そして、出稼ぎ労働者に留まることなく、より良い環境へ羽ばたいてほしいという想いである。タカハシさんのブラジル学歴社会での経験と日本での出稼ぎ労働者としての経験が、息子の教育を熱心にさせる原動力となったのである。

## 5. 考察

### 5.1 タカハシさんのライフストーリーが示す「家族の言語政策と家族のあり方」

タカハシさんは、親としての葛藤を感じながらも、自身の複数言語環境での育ちの経験を活かし、息子にとって最善と考える言語を選択した。また、「不安感を伴う言語能力意識」やブラジルと日本での経験を原動力に、息子の言語環境を整えてきた。

タカハシさんのライフストーリーから、タカハシさんの息子に対する言語選択、あるいは言語環境整備は、家族の言語課題を乗り越えるだけでなく、タカハシさん自身の生き方をも変化させていることが見て取れる。来日当初のブラジルで起業する夢は、日本で息子を教育するために断念した。むしろ、息子の教育こそが、タカハシさんの人生の最優先事項となったのである。その結果、厳しい出稼ぎ労働者としての経験を乗り越え、現在、日本社会で必要不可欠かつやりがいのある指導員の仕事に、誇りをもってあたっているのだ

る。つまり、家族の言語課題を乗り越えようとするうちに、自分自身の生き方をも変えていったのである。

タカハシさんのライフストーリーは、家族の言語課題が、家族の生き方を変えてしまうほど、家族全体にとって重要であると明らかにしている。日本で増加すると予想される移民家族にとっても、家族の言語課題が家族全体の生き方を左右する可能性があるとし唆しているのである。

福島（2014）は、「わたしの家族」の言語政策」というタイトルのエッセーで、複数言語環境にある家族の言語政策について述べている。このエッセーは、海外現場での日本語の継承を考える親や日本語教育に関わる人向けに書かれているが、タカハシさんのように日本で生活する複数言語環境にある家族にも参考になる。福島（2014）は、言語政策という言葉は一般的に「国の言語の取り組みについて用いられ」（p.9）とし、「言語政策とは、私たちの範囲である「国」の境界を「言語」によって特徴づけようとする意志とその実践」（p.9）と定義している。そして、言語政策の理論を家庭の言語に応用すると、「家庭内の言語を決定することは、「私たちの家族とはどんな存在か」ということを規定することになります。」（p.9）と述べている。さらに福島（2014）は、仕事の関係で世界中を転々とせざるを得なかった自身の家族の事例を引き合いに、家族内の言語の問題が「普遍性に回収されない、特殊性に注目する必要がある」（p.8）とした。そのうえで、家族の言語を検討する際に考えるべきこととして以下のとおり述べている。

継承語としての日本語教育というと、日本語を継承することが前提になるように見えますが、伝えたかったのは、まずは自分自身や家族自身のあり方を考えること。言葉はその後だということです。（p.17）

福島（2014）は、家族の言語政策を考えるにあたっては、言語の決定が家族の「あり方」を規定することになること、そして、家族の言語の問題の「特殊性」を踏まえ、親の言語を継承させようとする以前に、「自分自身や家族自身のあり方を考える」ことが重要であると指摘しているのである。つまり、まずはその家族のあり方を考え、目指す家族のあり方によって親の言語を継承させる・するかどうかを考えるべきだと述べている。

タカハシさんは、福島の言を意識して生きてきたのではない。タカハシさんは、自身の特殊性から、家族の言語を決定した。その結果として、家族のあり方を規定することになったのである。タカハシさんの特殊性とは、自らが複数言語環境で育ち、ポルトガル語と日本語のはざままで苦労した経験と、ブラジルと日本で暮らした社会背景から生じる経験である。これらの経験による特殊性をベースに、自分の国の言語を息子に継承させたい葛藤を超え、息子に対する言語選択、あるいは言語環境整備をしてきた。つまり、タカハシさんは、自身の特殊性を背景にして、日本で子育てをする過程の中で家族の言語政策を構築してきたのである。結果として構築された家族の言語政策は、タカハシさんの家族のあり方を規定してきただけでなく、家族の生き方をも牽引することになったのである。

## 5.2 日本語教育が考えるべきこと—移民家族を支えるために—

年少者日本語教育では、複数言語環境で子育てをする親の期待から、バイリンガル教育に研究の重心が置かれている、と先に述べた。しかし、タカハシさんのライフストーリーは、バイリンガル教育に年少者日本語教育研究の重心が置かれている状況に一石を投じている。タカハシさんの採った家族の言語政策は、バイリンガル教育とは真逆であった。その結果、ペドロくんは日本語モノリンガルとなった。一方で、タカハシさんの家族の言語政策は、複数環境に育つ息子の教育課題を回避したとも考えられる。複数言語環境で生きることとなった家族にとって、子どもの複数言語の習得が第一目標なのではない。その家族固有の特殊性と、家族が置かれた環境から、家族がどのようにありたいかを考えることこそが重要なのではないだろうか。

家族のあり方を踏まえた家族の言語政策がその家族の生き方を牽引することになるならば、移民家族の増加が見込まれる今、日本語教育に求められているのは、継承語教育やバイリンガル教育といった視点だけではなく、家族のあり方を踏まえた家族の言語政策に寄与することなのである。

## 5.3 移民家族の言語政策に寄与する日本語教育とは

日本語教育は、移民家族の言語政策に対し具体的にどのように寄与していけばいいのだろうか。筆者は、日本語教育の知見が家庭や教育・保育の場で活用されるよう現場の環境整備に携わることだと考える。タカハシさんの語りから、現場の環境整備を考える。タカハシさんが最初に直面した家族の言語課題は、息子が「周りの子どもより言葉が遅い」と感じた際、どのように対策するのが良いかであった。この課題を考えるにあたり、中島(2016)が参考になる。中島は、複数言語環境における子どもの言語発達に関し、幼児期の子どもにみられるダブル・リミテッド現象について述べている。要因は家庭環境にあるとし、これを「一時的ダブル・リミテッド」現象と呼んでいる(p.75)。そして「環境が変わり必要な言葉の刺激が与えられれば、正常に戻る可能性を十分持っている。」(p.75)と述べている。

中島の研究から、当時ペドロくんの言葉が遅いと観察されたのは、一時的な現象であるとの見方が可能である。しかし、タカハシさんの語り、「保育園先生の中にもちょっと遅いね、と言うか、言われたり」からは、当時のタカハシ夫妻が不安にさいなまれているにもかかわらず、適切な助言が得られなかった状況がわかる。保育現場は、日本語教育の知見が、適切に活用される環境に無かったのである。

その当時から概ね20年を経た現在、日本語教育の知見は、保育や教育の現場で活用されているのであろうか。現行の『保育所保育指針』や『幼稚園教育要領』(いずれも2018年版)では、外国籍家庭等の幼児に対する配慮が明記されている。また、平成29年(2017年)告示の新学習指導要領(小学校及び中学校)の総則には、日本語の習得に困難のある児童生徒への教育課程実施上の配慮事項が明記されている。さらに文部科学省は、日本語指導が必要な児童生徒の日本語能力の把握のため、『外国人児童生徒のためのJSL対話型アセスメントDLA<sup>9</sup>』を2016年に作成し、学校現場へ活用を促している。日本語教育の知見が現場に活用された事例の1つといえる。保育・教育現場では、現在、子どもの言語課



題が認識され、保育や学校教育における環境整備が進みつつある。

一方、松田・中川（2018）は、日本の日系集住地区における保護者の教育相談活動を行う中で、多くの日系の外国にルーツを持つ児童が「特別支援学級に在籍していること、その比率が日本人の発達支援学級の児童より多く存在すること」（p.30）を明らかにしている。この先行研究は、複数言語環境にいる子どもの発達を適切に見極められていない教育現場の実情を示している。日本語教育の知見が教育現場で十分活用されていない事例である。

日本語教育の知見が家庭や教育・保育の場で十分活用されていない現状を開くため、日本語教育は、子どもの育ちに関わる分野、例えば、学校教育、児童福祉、あるいは地域福祉などの分野と連携することが大切である。そして、日本語教育の知見が、移民家族や保育あるいは教育現場で共有され、移民家族の言語政策に活用されるよう現場の環境整備に力を入れるべきである。

## 6. 終わりに—日本語教育に携わる者が果たすべき社会的役割—

本稿は、タカハシさんのライフストーリーから、移民家族の言語政策が家族のあり方を規定し、家族の生き方を牽引することを明らかにした。そして、「移民受入れ時代」の今、日本語教育は、移民家族の言語政策にその知見が活用されるよう、子どもの育ちに関わる分野と連携することが大切であると述べた。

本稿を終えるにあたり、タカハシさんの家族の言語政策を今一度振り返ってみたい。タカハシさんは日本語を核とした家族の言語政策を採ってきた。その結果、息子は日本社会で教育上困難なく育った。しかしタカハシさんの家族の言語政策の背景には、日本語以外の言語話者には不寛容な日本社会の実情が課題として浮き彫りになったともいえる。日本社会が言語や文化の違いを受け入れる寛容な社会であれば、タカハシさんは、息子にポルトガル語を習得してほしい気持ちを封印しなくてもよかったかもしれないのである。

日本語教育に携わる者は、移民と接触する機会が多く「移民受入れ時代」の最前線にいる。多様な言語に寛容な社会づくりを理想とし、その理想の実現のため、模索し行動していくべきであろう。タカハシさんのライフストーリーは、今、日本語教育に携わる者が果たすべき社会的役割を示してくれているのである。

## 注

- 1 国際連合広報センター（2016）によると、移民の定義について、「国際移民の正式な法的定義はありませんが、多くの専門家は、移住の理由や法的地位に関係なく、定住国を変更した人々を国際移民とみなすことに同意しています」としている。本稿においても、移住の理由や法的地位に関係なく、定住国を変更した人々とする。
- 2 イシ（2018）は1990年入管法改正後のブラジルからの移民について、2000年代を「多くの在日ブラジル人が日本滞在を「一時的または暫定的」とみなす幻想から目覚めた時代」（p.221）とし「多くの人はブラジルでマイホームを取得し、起業するという、ブラジル時代の間層としての夢を移住先で実現した」（p.221）と分析している。
- 3 二宮（2019）は、ブラジル国籍の在籍大学、卒業生を「500名前後」（p.72）と推計している。在日ブラジル人の子どもたちの高等教育機関への進学が容易ではない実情を示している。



- 4 タカハシさんの住む自治体では、児童生徒の母語による教科学習や日本語学習支援、あるいは親・担任・学校間での翻訳・通訳業務をする「適応指導員」を学校現場に配置している。
- 5 高橋（1993）によると、「戦後、一世たちは爪に火を灯す思いで二世たちに高等教育の機会を与えてきた。」（p.342）とある。同著によると、1978当時の資料として、サンパウロ州の大学受験者総数に対する日系学生数が記載されている。サンパウロ州の日系人口は約2.3%である一方、日系人学生の率は10.7%であった。「予備校に、「大学に入りたかったらジャボネースを殺せ」といういたずら書きが書かれて物議をかもした」（p.343）という逸話まである。ブラジルの日系人が教育熱心であったことがうかがえる。
- 6 「あなたのことを思って」という言説のもと、善意の名においてなされる他者への干渉（稲垣2015、p.21）。
- 7 タカハシさんの住む自治体は、外国人集住都市会議の1つである。当該自治体発行の「多文化共生プラン」2016年版によると、「昭和62年（1987年）3月末に2人だった本市在住のブラジル国籍の外国人市民は、平成20年（2008年）3月末現在には4,030人と急増」とある。タカハシさんは、この自治体に外国人住民が増加する初期に移住したブラジル人の一人である。
- 8 川上（2011）は、「移動する子ども」だった経験を語る大人たちの語りから、「不安感を含めた、個の「主観的な言語能力意識」は、言語教育あるいは言語学習においてこれまで以上に重要な支援を提供する」と述べている。
- 9 アセスメントDLA（Dialogic Language Assessment for Japanese as a Second Language）は、文部科学省が国立大学法人東京外国語大学に委託して作成した。学校において子どもの日本語能力を測定するためのツールである。

## 参考文献

- イシ・アンジェロ（2018）「在日ブラジル人／デカセギ移民―日系人への帰国支援事業の受給者に着目して―」日本移民学会編『日本人と海外移住―移民の歴史・現状・展望―』pp.217-238、明石書店
- 石井恵理子（2007）「JSLの子どもの言語教育に関する親の意識―ポルトガル語及び中国語母語家庭の言語選択」『異文化間教育』26、pp.27-39
- 稲垣みどり（2015）「『継承日本語教育』における「パターンリズム」―在アイルランドの在留邦人の親に対するインタビュー事例から―」『早稲田日本語教育学』第19号、pp.21-40
- 尾関史・川上郁雄（2010）「『移動する子ども』として成長した大学生の複数言語能力に関する語り―自らの言語能力をどう意識し、自己形成するのか―」細川英雄・西山教行編『複言語・複文化主義とは何か―ヨーロッパの理念・状況から日本における受容・文脈化へ』pp.80-92、くろしお出版
- 川上郁雄（2011）『『移動する子どもたち』のこぼれ話の教育学』くろしお出版
- 厚生労働省（2021）「『外国人雇用状況』の届出状況まとめ（令和2年10月末現在）―外国人労働者数は約172万人。過去最高を更新するも、増加率は大幅に低下―」[https://www.mhlw.go.jp/stf/newpage\\_16279.html](https://www.mhlw.go.jp/stf/newpage_16279.html)（最終閲覧日：2021年4月7日）
- 厚生労働省（2018）『保育所保育指針解説』
- 国際連合広報センター（2016）『難民と移民の定義』[https://www.unic.or.jp/news\\_press/features\\_backgrounders/22174/](https://www.unic.or.jp/news_press/features_backgrounders/22174/)（最終閲覧日：2020年12月9日）
- 桜井厚（2005）「はじめに」桜井厚・小林多寿子編著『ライフストーリー・インタビュー―質的研究入門』pp.7-10、せりか書房
- 佐藤郁哉（2008）『質的データ分析法―原理・方法・実践―』新曜社
- 総務省統計局（2021）「（令和2年（2020年）10月平成27年国勢調査を基準とする推計値、令和3年（2021年）3月概算値）（2021年3月22日公表）」<http://www.stat.go.jp/data/jinsui/new.html>（最終閲覧日：2021年4月7日）

- 総務省統計局 (2020) 『日本の統計2020』 <https://www.stat.go.jp/data/nihon/pdf/20nihon.pdf> (最終閲覧日: 2021年4月7日)
- 高橋朋子 (2013) 「『移動する子ども』のことはと心を育むために親ができること」川上郁雄編『「移動する子ども」という記憶とカーことはとアイデンティティ』 pp.335-346, くろしお出版
- 高橋幸春 (1993) 『日系ブラジル移民史』 三一書房
- 友沢昭江 (2019) 「家庭言語環境調査から見える子どもの二言語能力—1年時と6年時の保護者へのアンケートとインタビューを通して—」真嶋潤子編著『母語をなくさない日本語教育は可能か—定住二世の二言語能力—』 pp.119-158, 大阪大学出版社
- 中島和子 (2016) 『完全改訂版 バイリンガル教育の方法—12歳までに親と教師ができること』 アルク選書 (初版は1998)
- 二宮正人 (2019) 「【特集】移民とことば—ブラジル日系人と日本語教育を例に—【帰国生支援活動: 還流する人の支援】ブラジルにおける日本就労帰国者子女への支援について」『早稲田日本語教育学』 26, pp.69-75
- 福島青史 (2014) 「『わたしの家族』の言語政策—複言語・複文化主義、CEFRから考える—」『つなぐ—わたし・家族・日本語—: ドイツ発: 海外に住む子どもたちの日本語習得・継承を考える冊子』 pp.7-17, 日本文化普及センター
- 法務省 (2018) 「新たな外国人材の受入れ及び共生社会実現に向けた取組 (在留資格「特定技能」の創設等) <http://www.moj.go.jp/content/001293198.pdf> (最終閲覧日: 2020年12月9日)
- 松田真希子・中川郷子 (2018) 「外国にルーツをもつ児童の発達アセスメントと言語の問題について—発達障害と一時的リミテッド状況の鑑別のための調査研究—」『金沢大学留学生センター紀要』 21, pp.29-42
- 三宅和子 (2018) 「国際結婚家庭2世代の『移動』と『選択』—母から娘の50余年間の軌跡をたどる—」川上郁雄・三宅和子・岩崎典子編『移動とことば』 pp.126-148, くろしお出版
- 宮崎幸江 (2014) 「多文化の子どもの家庭における言語使用と言語意識」『上智大学短期大学部紀要』 34, pp.117-135
- 三代純平 (2014) 「日本語教育におけるライフストーリー研究の現在—その課題と可能性について—」『リテラシーズ』 14, pp.1-10, くろしお出版
- 文部科学省 (2018) 『幼稚園教育要領解説』
- 文部科学省 (2017a) 『小学校学習指導要領 (平成29年告示)』
- 文部科学省 (2017b) 『中学校学習指導要領 (平成29年告示)』
- 文部科学省 (2016) 『外国人児童生徒のためのJSL対話型アセスメントDLA』
- 山田富秋 (2005) 「はしがき」山田富秋著『ライフストーリーの社会学』 pp.3-4, 北樹出版

(かのう まさみ 早稲田大学大学院日本語教育研究科・修士課程修了)